

自閉症スペクトラムのある方の短時間雇用に向けた支援実践 ー構造化支援と企業連携の実践報告ー

○濱田 侑希（特定非営利活動法人クロスジョブ クロスジョブ堺 職業指導員）

濱田 和秀（特定非営利活動法人クロスジョブ）

1 はじめに

本報告は、療育手帳A判定で、意思疎通や行動面に特性があり、日常的に継続的な支援を必要とする方が一般企業での就職を実現した支援事例である。厚生労働省の令和5年度調査¹⁾では、知的障害者の雇用者のうち重度に該当するのは11.8%に過ぎず、療育手帳A判定交付者全体²⁾に占める就労率も推計15～16%程度に留まっている。

このように「一般就労が難しい」とみられがちな対象者への支援において、支援機関と企業がどのように連携し、就労移行支援の取り組みを通じて形成されていった対象者の「働きたい気持ち」に寄り添い、就労の実現へとつなげたのか、その実践内容を報告する。

また本事例では、家庭療育・構造化支援・短時間就労制度など、さまざまな資源が連携・活用された。障害特性により制限されるのではなく、特性に応じた支援環境を構築することが、就労という社会参加を可能にする道であることを示したい。

2 方法

(1) 対象者

タロウさん（仮名）、20代、男性。自閉症スペクトラムを伴う知的障害があり、療育手帳A判定を所持している。発語は限られ、意思疎通は絵カードやクローズドクエスチョンを用いる。視覚的情報を通じて理解しやすく、終わりの見える作業に安定して取り組める特性がある。

2歳になっても発語が見られず、2歳6か月で健診を受診。3歳1か月時に自閉症スペクトラムの診断を受け、家族は支援機関で対応を学び始めた。地域の専門機関において1年間の療育的支援を受けた後、家族が継続的な専門支援の必要性を感じ、合同会社「オフィスぼん」の専門家から月1回の指導を受け、幼少期から高校卒業まで継続的に支援を受けた。

また、家庭でも視覚的構造化を取り入れ、本人が「理解できる環境」の構築を行い、「できることがある」と実感できるよう支援が積み重ねられてきた。その結果、高い自己肯定感が形成されて挑戦する姿勢が本人の中で育まれた。

(2) 準備期のアプローチ

就労移行支援事業所では、まず20種類以上の作業を試し、対象者の得意・不得意を把握した。

特に混乱の要因であった「見通しのなさ」や、周囲の環

境刺激による集中の困難さに注目し、作業環境の構造化を実施した。具体的には、視覚や音などの刺激が少ない個室を用意し、静かな環境で安心して取り組めるよう配慮した。

作業内容についても、自閉症の学習スタイルに合わせた視覚的構造化を行った。たとえば、カラーボックスの上段から下段へ順番に作業を進めることで、完了の見通しが立ちやすくなるよう工夫した。また、1日の活動内容はカードで視覚的に提示し、「次に何をするのか」「どこで終わるのか」が理解できるように支援した。

このように、対象者が「これならできる」「自分にも役割がある」と感じられるよう、安心して取り組める環境整備と見通しのある支援を丁寧に重ねていった。

また、生活面では信号の待ち方や渡り方の支援、対人面では人に突然触れてしまう行動への対応支援を行うなど、日常生活での安定した行動を目指した取り組みも並行して実施した。



作業環境の構造化

(3) 企業開拓

企業開拓は、ハローワークの求人情報に加え、対象者が通勤可能な範囲（電車の複雑な乗り換えが不要なエリア）にある企業を中心に、電話でのアプローチや訪問を行った。合計で約130社に対して開拓活動を実施した。

その過程で感じたのは、「言葉によるやり取りが難しい」という特性への受け入れ姿勢をもつ企業が極めて限られているという現実であった。それでも、対象者に合った実習先を探し、3社の企業実習を実現した。

(4) 職場調整

就職先企業に対しては、対象者の「言葉によるやり取りが

難しい」という特性に対し、不安の声があった。そこで、視覚的な支援ツールの活用や、作業工程の細分化、短時間勤務の設定など、具体的な支援方法を説明した。また、勤務形態として「1日2時間の短時間勤務」「業務の切り出し」「支援者の同行」を提案し、実習へのハードルを下げた。

実習期間中は、対象者の行動や支援内容、安定状況を日報形式で毎日企業に報告。こうした情報共有が企業内での安心感につながり、人事部からは「支援があれば任せられる」との評価を得ることができた。実習を通じて、企業としては雇用に前向きな判断が進められていた。

一方で、最終的な雇用判断を担う店舗の店長からは、実習後の面談において「店舗業務は忙しく、本人に丁寧に関わることができない。そういった部分で、他の企業の方が本人にとって良いのではないか」といった善意からくる助言があった。この発言の背景には、対象者の特性への不安や、丁寧に対応できないことへの配慮の気持ちがあったと考えられる。

これに対しては、「そうした配慮が保護的な思考となり、結果的に本人の可能性を狭めてしまうこともある」と丁寧に説明し、就職後の支援体制についても具体的に提案した。

その結果、店長も理解を深め、企業全体として挑戦の場をともに築いていく姿勢が固まり、就労移行支援事業所利用30か月で雇用が実現した。

3 成果

雇用後11か月経過した現在、対象者は週5日・1日2時間の短時間勤務で、公共交通機関を利用して1人で通勤している。勤務先では、業務工程を視覚的に提示することで、ほぼ支援なしで安定して作業に取り組むことができるようになった。さらに、定着支援としてジョブコーチを導入し、企業との定期的な情報共有や課題の整理を行うことで、本人が安定して働ける環境を維持している。

企業側からは「毎日変わらず出勤し、着実に仕事をこなす姿が社内の雰囲気にも良い影響を与えている」との評価を得ている。

当初は「支援があれば任せられる」と考えていた企業においても、実際の勤務を重ねる中で、本人が自立して作業を遂行できることが明確になり、「本人自身の力で業務を担っている」という認識へと変化していった。

そのような企業評価の変化と呼応するように、就労の継続を通じて、対象者自身にも内面的な変化が表れた。

ある日、店舗で朝礼の開始が遅れた際、対象者は落ち着いた様子でチーフに「朝礼、ない？」と自ら声をかけた。これまで、場面に応じた質問をするようなコミュニケーションはほとんど見られなかったが、この日は状況を適切に捉え、自ら確認するという行動をとった。チーフは「本

人とコミュニケーションがとれていることに感動した」と語り、本人の成長を実感する出来事として共有された。

こうした変化の背景には、日々の通勤や勤務を継続する中で、「自分の役割を果たしている」という実感が積み重なっていったことがあると考えられる。まさに、就労という経験が対象者の内面に肯定的な影響を与え、「意欲が能力を引き上げる」ことを体現するエピソードであった。さらに、就労を通じて対象者の生活面にも肯定的な変化が生じている。「ありがとう」「ごめん」といった言葉のやりとりが増えたほか、時間やお金に対する意識の向上、身だしなみやルール遵守といった社会的スキルの獲得も見られるようになった。毎日決まった時間に通勤し、自分の役割を果たす経験が、対象者にとっての達成感や自己肯定感の向上にもつながっている。

4 考察

療育手帳A判定で、意思疎通や行動面に特性があり、日常的に継続的な支援を必要とする方においても、特性理解に基づく支援環境の構築や、家庭療育、企業との丁寧な対話と連携を通じて、安定した就労は十分に可能であることが本事例から明らかになった。

就労の可否を「できないこと」から判断するのではなく、「できること」「できそうなこと」を丁寧に見極め、環境や支援の工夫によってその可能性を広げていくことが、支援者の重要な役割である。

また、企業側が抱える不安や固定観念に対して、支援者が根気強く働きかけ、本人の可能性を信じ続けることは、就労に向けた大きな推進力となる。支援機関・家庭・企業が三位一体となって歩むことで、「特性があっても働ける」から、企業が「特性が職場に良い影響を与える」存在として捉えるようになる支援を重ねることは、社会全体が「特性＝欠点ではない」と理解する基盤にもなる。

本事例は、「誰にでも働ける可能性がある」という理念を、具体的実践をもって示すものであり、今後の障害者雇用のあり方を考える一助となることを願う。

発表を通じて、障害の重さだけで可能性を判断せず、一人ひとりの持つ力を信じて支援を重ねていくことの大切さを、広く社会に問いかけたい。

【参考文献】

- 1) 厚生労働省『令和5年度障害者雇用実態調査結果の概要』(2024)
- 2) 厚生労働省『療育手帳所持者数(全国)』(2023)

【連絡先】

濱田 侑希
就労移行支援事業所 クロスジョブ堺
e-mail : y.hamada@crossjob.or.jp

芸術（音楽）領域における 知的障がい者の職業リハビリテーションに関する実践報告

○佐々木 浩則（株式会社ヤマハアイワークス 専任ジョブコーチ）

1 はじめに

本報告は、知的障がいのある個人（以下「本人」という。）の音楽活動が、いかにして天職へと育まれたか、その具体的プロセスを振り返るものである。本人の主体性と父親の伴走支援が相乗効果を生み共働・共生へと昇華した結果、ピアノ即興演奏は本人にとって「生きることそのもの」となり、「自分のピアノカフェを持つ」夢を実現した。この実践を通じて、音楽活動における職業リハビリテーションの意義と可能性の一端を明らかにしたい。

※本報告は、本人の同意を得て公表するものである。

2 音楽を通じた初期発達と自己肯定感の醸成

(1) ピアノの手ほどき（小学1年生～）

教師との連弾形式の教材を用いることで、本人は簡単な音を弾くだけで豊かな音楽体験を享受できた。このポジティブな学習体験は、音楽と協働作業への興味・関心・意欲を高め、達成感、自己効力感、継続的な学習意欲、他者への信頼感や感受性を育む基盤となった。

(2) 即興演奏遊び（小学2年生～）

即興演奏は、本人と父親による「音と言葉のキャッチボール」として始まった。本人が自由に音を鳴らし、父親がその音から浮かんだイメージを言葉で伝えることで、イメージの言語化を苦手とする本人と父親の間に豊かな音楽世界が創造されていった。本人は今もなお、ただ無心に演奏し、聴く人が心に様々なイメージを浮かべる。その共同作業を大切にしている。

この活動は、練習や指導のない「安心できる本番」の連続であり、常に自己表現が受容される環境を提供した。その結果、本人は緊張することなく集中して伸び伸びと演奏し交流する姿勢を身につけた。この姿勢は音楽活動に留まらず日常生活にも影響を与え、非認知能力が内発的な動機付けと自己表現の喜びを通じて育まれた。これらが将来的な演奏活動の基盤となり、天職（特に生きがいと自己実現の側面）へと繋がった。

(3) 鑑賞活動を通じた自己選択能力の育成（小学3年生～）

音楽CDと一緒に聴き、多様なコンサートに親子で参加する中で、音楽をどのように表現し、共有し、心を動かすかを無意識に体験する機会が増えた。徐々に本人が単独でコンサートに参加するようになり、また音楽関連の映画やDVD鑑賞を通じて「人と音楽の関わり」への理解を深めた。最終的には鑑賞する音楽や映像を本人が自ら選択する

ようになり、多様な興味・関心、社会性、適応能力、そして自己選択・自己決定能力が育まれた。

3 社会的交流と専門性向上のための活動

(1) セッション参加と演奏交流（中学2年生～）

様々な音楽ジャンルのセッションに参加してアンサンブルの楽しさを経験した。その中で簡単なコードでの演奏方法を習得し、先輩の演奏を模倣することで表現の幅を広げた。美術・演劇などとのジャンルを越えたコラボレーションや地域を越えた活動は、ニュージーランドにおけるワーキングホリデー中のストリート演奏や現地イベント出演にまで広がった。オリジナリティ溢れるピアノ即興演奏は、見知らぬ土地での長期滞在交流の大きな支えとなった。

(2) 全人的アプローチによる人間力の醸成（小学5年生～）

剣道やフットサルは、体力や集中力だけでなくチームワークやレジリエンスを育み、これらが音楽のダイナミズム、他者との協調、困難な状況でのパフォーマンス維持に繋がった。

旅や社会交流活動を含めて父親は多くの場と一緒に参加して体験を共有し伴走支援した。これらが音楽活動の質を高め、また多様な場で役割を担うことで、演奏活動は天職として社会とつながる手段となった。以上の「全人的アプローチ」による「総合的職業準備」により、共働力や人間力といった音楽活動全体の土台となる能力が培われた。

(3) 専門的な音楽学習（小学6年生～）

専門的な初步指導を受け、音楽専門学校高校科への進学後も多様なジャンルの音楽を積極的に学んだ。進学以前の活動により興味・関心・意欲・態度が育っていたため、高校進学後の厳しいレッスンにも意欲的に取り組み、高い学習意欲、困難への適応力、多様な学習方法への対応力、協調性が育まれた。以上により、これまでの活動で培われた基礎能力が、より専門的かつ実用的なスキルへと発展し天職の基盤となった。

4 職業的アイデンティティの確立とキャリア形成

(1) 父子共演を通じた実践的職業能力向上（中学3年生～）

父子共演を、被災地を含む様々な場で行った。その中でも特に「葉っぱのフレディ（朗読とピアノ）」を生涯にわたる活動演目と位置づけた。朗読とピアノを重ねず交互に演じることでピアノの自由度を確保し、後に本人が朗読と演奏の両方を担当することも可能にした。この物語から

「父が亡くなっても独りではない。いのちは永遠につながっている」と本人が実感することを願っている。これらの活動は、これまでの個別の成長を集大成し、共働・共生の実践的な職業能力と職業人生観、社会貢献意識を育む機会となった。

(2) プロフェッショナル基盤の構築（高校2年生～）

多様な演奏を様々な場で楽しむ経験を経て、リサイタルを定期的に開催するようになった。初回は即興ソロ演奏とバンド演奏の二部構成であったが、回を重ねるごとに本人が選曲やMCも担当し、ソロリサイタルもできるようになった。多様な形式（ソロ／コラボ、オンサイト／オンライン、有料／無料など）で継続している。以上により、これまでの音楽活動で培われた能力を総合的に活用し、プロフェッショナルとしての基盤を築いた。

(3) 作品制作を通じた自己再構築と職業的アイデンティティの確立（23歳～）

知的障がい診断を受容できずパニックになり入院を繰り返した経験から、父親は「このままでは息子の人生が終わってしまう。始めないと始まらない」とレコーディング／CD制作を決意した。精神的な危機の中で、心に嵐が吹き荒れるワンパターンな即興演奏では作品にならないためジャズを中心とした選曲を行い、内向的なエネルギーに満ち研ぎ澄まされた演奏が生まれた。またレコーディング前日にリサイタルを行うことで演奏の完成度を高めた。その後は即興演奏を中心に、回復過程の生き様を記録するオリジナルなアルバム制作を続けている。

即興演奏は本人の主体的世界であり他者からの指導やアドバイスを必要としない。この活動は、精神的な危機からの回復を目指す自己再構築の過程で、創造性、プロフェッショナル意識、目標達成能力、そして自己の生き様を表現する職業的アイデンティティを確立するために重要な役割を果たした。回復してからではなく「回復途上にあっても、音楽と心は深まる」ことを実感して支援を続けている。

(4) ピアノカフェとインターネット配信による持続可能なキャリア形成（28歳～）

パニック症により外出が不自由な状況で本人自身が考えた「自分のピアノカフェを持ちたい」という夢をきっかけに、既存のカフェを引き継ぐことになった。但しこれは、本人の夢を深掘りし、健康状態と生活状況を考慮した結果、一般的なカフェ営業ではなく、プライベートスタジオとして友人との交流や演奏を行う場となった。

父親の「自由にピアノカフェを続けるためにも、今こそ働こう」という言葉が本人の就職を後押しし、パニックでバスに乗れない本人は「自動車が運転できれば安心して通勤でき働ける」と意欲を高めて免許を取得し就職した。現在では定職を持ちながらカフェからピアノ演奏をネット配

信し、グローバルな交流を目指している。この活動は、これまでの経験を統合し、自身の夢を起点に現実的な状況と折り合わせながら就労を実現し、さらにデジタル技術を活用して自己表現と社会参加の場をグローバルに拡大していく、持続可能なキャリア形成の新たな形を創出している。

5 結び

本報告で示したプロセスは「生きづらさを抱えるわが子を、音楽の力で幸せにしたい。一緒に幸せになりたい」という父親の強い思いが、都度の選択と積み重ねを生み出したものである。その中で、本人のピアノ即興表現が聴く人の心に「働きかけ」、その価値が明らかになるにつれて活動が広がり、対価や報酬が発生した。

「仕事の価値は相手が決めるもの、報酬は金銭に限らない」という考えのもと、無料から有料までご縁に応じて活動を続けている。より高次の普遍的な目標である「幸せにしたい、一緒に幸せになりたい」という共働・共生・ウェルビーイングの追求が、多様で継続的な活動を生み出した結果として、音楽が本人の天職となった。

この実践は、個人の「幸せ」と「生きがい」を追求するプロセスにおいて、芸術活動がその強力なツールとなり得ることを示している。そして、共働・共生・ウェルビーイングを目指すことが、知的障がいのある人の持続可能なキャリア形成と豊かな社会参加を実現するための鍵となることを実証した。

以上の成長の大半は、本人も周囲も知的障がいを認知・意識しないリスクリークかつインクルーシブな環境で実現した。その後17歳で受けた障がい診断を受容できず2次障がいとしてパニック症を発症した。「息子と同じ世界で生きたい」とジョブコーチになった父親をはじめとする医療・福祉・雇用の専門支援チームをもってしても回復の道は成長と比べて遥かに険しい。自尊心と社会への信頼を回復し、ピアノカフェを、地域に根差すと同時にグローバルな活動・発信拠点として安心して暮らすためにも、共生社会の実現を目指したいと考えている。

【連絡先】

e-mail: hironori.sasaki@music.yamaha.com

【演奏映像】

<http://www.youtube.com/@yupa2025>

障害者×スポーツ体験＝無限大 ～スポーツから広げる多様性文化の創造～

○井上 渉（就労移行支援事業所INCOP京都九条 代表）
○境 浩史（株式会社島津製作所 人事部 シニアエキスパート）

1 概要

就労移行支援事業所INCOP京都九条（以下「INCOP」という。）は、京都駅から徒歩10分に位置している。弊社は、井上の京都市立支援学校での進路指導主事としての経験を活かし2023年2月に開所した事業所である。社訓に「やってみよう！」を掲げ、生の経験・体験の機会を重視した「超実践型トレーニング」を利用者に提供している。また、就労だけでなく、生活、余暇を含めた「WorkとLifeのINCOP」を目指し、日々サポートしている。知的障害や発達障害のある利用者が多く在籍している。

その中で、2023年9月より株式会社島津製作所ラグビー部「SHIMADZU Breakers」（以下「Breakers」という。）との連携を開始し、「スポーツを通した就労支援」に取り組んできた。「Breakers」は社会人チームとしてトップウェストAリーグにて活躍しているラグビー部である。「Breakers」との関わりを中心にしながら、活動の広がり、利用者の学びや成長について紹介したい。

2 「SHIMADZU Breakers」との連携のきっかけ

株式会社島津製作所とは、代表が特別支援学校勤務時からつながりがあり、実習、雇用と連携していた。また、島津製作所が主催した障害者向けのテニス教室実施でも連携をしていた。

「Breakers」では、スタッフが少ないため控えの選手が試合会場の準備や試合中の水分補充をしていて、ウォーミングアップが十分できていない状態の中、途中交代で試合に入るような状態であった。

「Breakers」のニーズ	「INCOP」のニーズ
- 選手が試合に集中したい - ホームゲームの運営を充実したい	- 利用者の体験の場を増やしたい - スポーツで見識を広げたい

「Breakers」と「INCOP」のニーズを組み合わせ、まずは、ホームゲームの準備、片付け、また試合中の選手の水分の補充といった試合中のサポートを「INCOP」とともにやってみようとしてスタートした。

3 活動の軌跡

2023年秋シーズンからの連携で、2シーズンを経過

し、2025年11月は3シーズン目を迎える。印象的な事例を紹介する。

(1) エピソードとその含意

ア 理解を深める

連携することは決まったものの「Breakers」の選手・コーチ陣は、障害理解が十分でないということもあり、「何ができるのか」「どこまで頼んでいいのか」と不安があった。事前に打ち合わせはするものの、はじめは当日、現場でチーム、利用者、支援者で都度相談しながら活動を進めていった。しかし、未知からくる不安は、関わりをもつことで既知になり、できること、難しいことも自然と洗練されていき、役割の定着につながった。さらに役割を果たすことで、信頼につながり、初めは依頼されていなかった受付での業務や試合写真の撮影、花道や円陣への参加といった役割の拡大にもつながっていった。

イ 作業を改善する

試合中の水分補給で、水とスポーツドリンクの2種類のタンクから黒い目印で判別しながらボトルに入れていく、という工程がある。「目印がある方がスポーツドリンク」を間違え、判別に時間がかかる利用者が多かった。ある利用者から、「スポーツドリンクの補充のタンクに同じ印をつけたらわかりやすくなるのでは」と提案があった。その意見を「Breakers」側に伝えるとすぐに対応していただいた。すると、利用者の作業効率が格段に上がり、スムーズに水分補充できた。このことが、利用者の自信につながったことはもちろんであるが、

「Breakers」にも「ちょっとした工夫をすれば色々なことができる人たち」と認識してもらい大きなきっかけになった。



目印の工夫

ウ 連携作業を学ぶ

作業の多くは、複数名でないとできないため、声を掛け合って動く必要性が生まれる。また、「Breakers」の選手・コーチ・スタッフとも連携する必要がある、報告・連絡・相談などを瞬時におこなう場面も多く存在する。そのことが、声を掛け合う習慣を身につけ、協力する力を養う場にもなっている。普段はおとなしい方が、まわりに声をかけながら活動を支えている場面が見られたり、少しずつ声を出そうと頑張ったりという成長が見えている。

エ 視野を広げる

利用者のほとんどはラグビーのルールを知らない状態で活動をスタートしている。はじめは、いつ点が入るのか、どういった状態なのかあまりわからないまま活動していることも多かった。活動を重ねることで、試合の動きが分かるようになり、見通しを持って活動できるようになるだけでなく、ナイスプレーに歓声をあげられるようになり、水分補充を忘れて試合観戦に集中する利用者もいるほど、チームを「支える人」そして「応援する人」に「成長していく」様があった。

オ 誇りを感じる

“INCOP”の利用者は“Breakers”のチームカラーにちなんで「レッズ」という愛称をもらって、チームの一員として位置付けられている（今年度から公式資料にも明記していただいている）。「レッズ」としてチームの一員としての位置づけが、利用者の帰属意識を高め、一種の誇りを感じている方もいて、そのことが一層の自己効力感を得ることにつながっている。

カ 関係を深める

当初は、活動の取りまとめとなるコーチ陣との連携がほぼであったが、回数を重ねることで、他のスタッフ、選手から直接声をかけられる事が増えた。ちょっとした「こっち手伝って」を気兼ねなく声をかけてもらえることは、互いの信頼関係、“INCOP”の利用者への理解が高まったからであると感じている。

また、過去2回、京都で開催される田んぼラグビーにも“Breakers”と“INCOP”共同で出場した。その場でも選手、コーチと利用者が一緒にプレーし、泥にまみれて、関係も深める機会になった。

キ 就労につながる

この活動を通して、「“INCOP”の利用者ならこんなこともできるのでは？」と島津製作所グループ内で障害者雇用の職域が広がり、実際に“INCOP”の利用者も就労している。“Breakers”の選手も職場の上司として在籍し、ラグビーを通して培った信頼関係が新しい職域、職場にもつながっている。

(2) 現在の活動

主に準備・片付けと試合中の活動に分けられる

<準備・片付け>

- ・選手・関係者用のテントの設営（撤収）
- ・応援席の設営（撤収）
- ・キッズエリア（キックターゲット等）の設営（撤収）
- ・受付の設営（撤収）、受付業務（選手名簿、応援旗等の配布）
- ・ゴールポストガード、得点版、タッチフラッグの設置（撤収）

<試合中（アップ時含む）>

- ・選手用ドリンクの準備

- ・スコアボード管理

- ・広報用写真撮影



試合準備



活動の様子
受付準備



水分補充

上記の活動は、“Breakers”のスタッフ数名と一緒に準備していて、細かな指示が無くても“INCOP”がある程度自立して準備できることも増えている。今までの経験の中で、“INCOP”利用者も手順、方法が見通せるようになり、“Breakers”も「こう言ったら、こうやってもらえる」といった指示や準備の要点がつかめてきたことが大きい。また、受付業務をはじめとしたチームの顔となる業務を任せていただいていることも、お互いの信頼の高まりを象徴している。

4 今後について

障害者の地域社会参加という言葉は使い古されたほどよく使われるが、実際にまだまだ参加の社会へ広がる余地があるように感じている。今回、「ラグビー」というスポーツを通して、「プレーする人」「支える人」「応援する人」が障害を越えて連携し、勝利を目指し、共有していく姿は、障害者の社会参加にとどまらず「多様性文化の創造」がそこにあった。多様な人が、1つの目的を共有し、それぞれの立場で役割を果たす、という文化がここにある。スポーツ体験には、この文化を色々な場所に広げて、大きくしていく力、可能性があることを実証している。スポーツの持つ無限の可能性を信じ、我々は他の場所でもスポーツを通じた障害理解に努めている。以下は現在“INCOP”が取り組んでいる活動の一例である。

- ・京都マラソンにおけるボランティア
- ・京都ハンナリーズ（B.LEAGUE所属プロバスケットボールチーム）におけるボランティア
- ・滋賀国スポ・障スポにおけるボランティア

ともに働く力を高めるために重要な場と位置付け、効果的に活用している。さらに、「応援する人」としての可能性をもとに、利用者とスポーツを余暇としてつなぐ取り組みにも注力している。

これらの取り組みがきっかけとなり、スポーツを通じた新たな文化が無限に広がっていくことを切に願っている。

【連絡先】

井上 渉
就労移行支援事業所INCOP京都九条
e-mail : incop.inoue@gmail.com

知的障害者を対象とした農的活動等を組合せた学習プログラムの 持続的改善プロセスのデザイン

○前川 哲弥（NPO法人ユメソダテ 理事長/株式会社夢育て 代表取締役）
外山 純・天田 武志（NPO法人ユメソダテ）

1 夢育てメソッド

夢育ては、2022年10月から東京世田谷の夢育て農園において、知的障害のある成人青年受講生に週1回2時間半の学習機会を提供し成長を促す“人を育てる畑コース”に取り組んでいる。同コースで提供しているプログラムは、受講生をリラックスさせるとともに心身を活性化し¹⁾、認知発達を促すことを報告した²⁾。その後も、認知的成長を継続的に測定し^{3) 4)}、認知的成長が心理的安定を生み、次に行動の変化につながり、家族がその変化を感じていることも確認した⁵⁾。この夢育てメソッド⁶⁾は、身体発達を促す体操と、認知発達を促す座学、主体性を育てる夢語り⁶⁾と、農的活動から構成されており、前川他はこれらの成果を論文にまとめた⁷⁾。

他方、今後、同メソッドを、福祉事業所や障害者雇用企業に導入することを想定して、夢育てメソッドの継続的改善方法の導入と、夢育てアライアンスという緩やかな連携組織の立ち上げを進めている。

2 淡路式農作業分析表の導入による夢育てメソッドの持続的改善

人を育てる畑コース開講当初から、毎週木曜日のコース直後に講師が集まって開催している振り返りの会と毎週月曜日にその週の木曜日のプログラムの内容を話し合うプログラムを計画する会を開催している。

前者は、個々の受講生がその日のプログラムをどの程度理解し、どんな困難を抱えているかといった課題を確認する場である。そして後者は、前週の木曜日に明らかになった個々人の課題に対して、次の木曜日にどんな学習を用意し、どのように媒介する（学びを促す）のかについて話し合ってきた。これらの議論の場で、体操と座学といった基礎的な学びと農作業における応用的な学びの間の結びつきについてより客観的な評価を行うことを目指してきた。

そこで、2025年6月より、淡路式農作業分析表を用いた農作業分析を導入した。この分析表は、豊田ら（2016）⁸⁾が開発したもので、一つ一つの農作業について、①パターン化の有無、②必要な動作、③作業姿勢、④作業負担度、⑤両手の使用方法、⑥巧緻性、⑦作業中の主な注意の対象、⑧最多注意配分数、⑨危険度、⑩作業形態、⑪工程数、⑫条件数、⑬リスク管理上の注意点、⑭正確に作業を行うためのポイント、⑮作業速度を上げるためのポイントという

15項目にわたり細かく記述しつつ、分析を行う。

ある農作業を難なくできる人にとって、知的に障害のある人が作業のどの部分で躓いているのかを見極めることは容易ではない。手や足の巧緻性の問題なのか、作業中に注意を向けるべき箇所の理解や、収穫のように基準となる色や大きさとの比較といった認知上の問題なのかを理解するには、作業を分析して、どこで躓いているのかを明らかにすることが求められる。そこで、農作業分析を事前に行い、受講生が躓きそうな場面を事前に想定する作業を始めた。

例えばピーマンの収穫作業の分析では、以下のように受講生が躓きそうな箇所が明らかになった。

- ① 作業姿勢：しゃがむ力（上手く植物体の上から下に順序良く収穫対象を見いだすために必要）
- ② 作業中のおもな注意の対象：緑色の植物体の中から緑色の実を順序良く見つける力＝地と図の分離とsystematic searchの課題
- ③ 作業中のおもな注意の対象及び条件数：基準と比較する力（例えば長さ10cm以上の実を選ぶ力）spontaneous comparative behavior
- ④ 両手の使用、巧緻性、及び作業中のおもな注意の対象：柄に的確にハサミをあてる力＝認知的な参照点の理解、身体的な的確にハサミをあてる巧緻性

これらを踏まえて、足の柔軟性や手の巧緻性を高める体操をしたり⁹⁾、比較や点繋ぎの課題（点群の組織化）や図形の分解とくみ上げ（図形の部分を組合わせて全体を再構成すること）の課題（分析的知覚）¹⁰⁾をしたりすることで基礎的な力を準備することができる。これらに加えてピーマンの植物体の枝の伸び方や実のつき方の全体像についても事前に学んだ。更に、畑での作業にはマンツーマンで指導者がつき、一つ一つの作業を一人一人の認知身体機能に合わせて媒介することで、受講生に“できる”という成功体験をしてもらい、できる作業を増やしていつている。

またジャガイモ掘りについても同様に作業分析を行った。この作業は、認知的には、作業中の主な注意の対象：畝を崩すことをイメージできること（Orientation in space）、端から順序良く掘ること（Systematic search）、土の中からの的確に芋を見つけること（Clear perception）が特に大切で、運動機能的には、しゃがめること、及びそのまま横に移動できることが大切である。

これらを踏まえ、空間認知や端から順序よく作業するこ

とを促す座学を行い、体操では足の柔軟性の向上を重点的に行うことで、今春のジャガイモほりでは受講生が昨年よりも深く広く土を掘り、上手くジャガイモを見つけていた。

本稿執筆時点で淡路式農作業分析表を導入してから2カ月ほどが経過したが、緑の植物体から緑色のピーマンの実を見つけられなかった受講生が見つけれられるようになり、ピーマンの主幹を切ってしまっていた受講生が的確にピーマンの実の柄を切ることができるようになる等受講生の農作業能力の向上に手ごたえを感じている。今後も、淡路式農作業分析表を用いて、基礎的な体操・座学と応用的な農作業との間に有機的でシステムティックな繋がりを一層高めていき（図1）、夢育てメソッドの継続的改善を続けていきたいと考えており、その成果は改めて報告する。

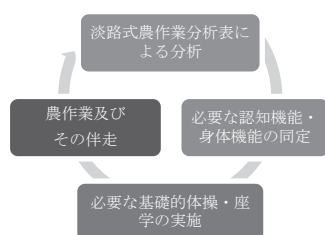


図1 夢育てメソッドの継続的改善プロセス

3 夢育てアライアンス

夢育ては、知的に障害があっても、成人していても、環境を整え、やり方を工夫すれば成長し続けることができることを、実例をもって示してきた。しかし、夢育てだけでは、成人知的障害者の学びの機会を社会に広げることにはできない。そこで、夢育てで用いている方法を夢育てワークショップを通じて、関心を持って下さる方々にお伝えするとともに、障害のある方にその方法を用いる際に伴走を行う“わかるをひろげる”事業を展開している。こうして学んだ方々は既に54名に達している。

そのうち特に意欲のある福祉事業所や障害者雇用企業、農家等と2024年10月夢育てアライアンス（図2）を結成した¹¹⁾。「成長の喜びと夢のある人生を全てのの人に」との理念の下、各メンバーは、その利用者や従業員に成長の機会を提供し始めている。本年8月～9月にかけて、その最初の取組みとして、千葉県内の福祉事業所1カ所と、障害者雇用をしている企業1社で、知的障害当事者の現在の認知機能を測るアセスメントを実施する予定である。その後、夢育てメソッドの全部又は一部を導入し、1年程度後に再度アセスメントを実施することで、彼らの認知的成長を測るとともに、彼らができる仕事の幅が広がる等の効果が得られるのかどうか検証していきたい。

これらの事例で成果をあげることができれば、知的に障害があっても成人していても、生涯にわたる学習に取り組むことの意義を広く理解してもらえるのではないかと期待

している。そして私たちは、この方法を農業以外の職場や作業所にも適用できるものと考えている。

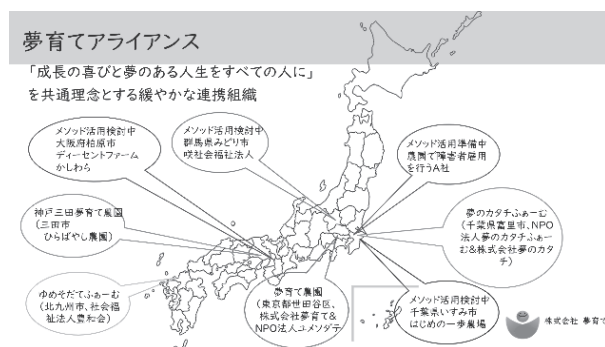


図2 夢育てアライアンス

【参考文献】

- 1) 前川、千葉、岡元、吉廣『畑作業と体操、座学を通じた学習が、知的障がいのある青年のストレスや心身の状態に与える影響について』JEED 第31回職業リハビリテーション研究・実践発表会発表論文集（2023）, p. 60-61
- 2) 外山、前川『畑作業と体操、座学を通じた学習が、知的障がいのある青年の認知発達に与える影響について』JEED 第31回職業リハビリテーション研究・実践発表会発表論文集（2023）, p. 62-63
- 3) 外山、前川『体操、座学、畑作業を組合わせた学習プログラムが知的障がいのある青年の認知発達に与える影響についての継続的な研究』JEED 第32回職業リハビリテーション研究・実践発表会発表論文集（2024）, p. 128-129
- 4) 外山、前川、天田『体操・座学・畑作業などを組み合わせた学習プログラムが知的障がいのある青年の認知発達に与える影響—3年間の取り組みを通して—』JEED 第33回職業リハビリテーション研究・実践発表会発表予定（2025）
- 5) 前川、外山『体操、座学、畑作業を組合わせた学習プログラムの概要と知的障がいのある青年の行動変化及び生涯学習法としての活用可能性について』JEED 第32回職業リハビリテーション研究・実践発表会発表論文集（2024）, p. 130-131
- 6) 前川哲弥『夢を育て認知機能の伸びしろを評価・共有することを通じ、知的障害者の主体性を育て、積極的な職場文化を作る試み』JEED 第29回職業リハビリテーション研究・実践発表会発表論文集（2021）, p. 54-55
- 7) 前川、外山、天田、竹下、前川、豊田、山田、町田『知的障害者を対象とした農的活動を組み込んだ学習プログラムの開発と効果の検証』『食農と環境』No. 40（2025年10月発行予定）
- 8) 豊田 正博, 金子 みどり, 横田 優子, 浅井 志穂, 札埜 高志, & 城山 豊『知的障害者就労支援における農作業 分析と難易評価法の開発』人間・植物関係学会雑誌 15（2）1-10 2016年3月31日
- 9) 天田、外山、前川『知的・発達障がい者への農作業支援における運動プログラムの導入と効果』JEED 第33回職業リハビリテーション研究・実践発表会発表予定（2025）
- 10) Feuerstein, R., Feuerstein, S., Falik, L & Rand, Y. (1979; 2002). Dynamic assessments of cognitive modifiability. ICLEP Press, Jerusalem: Israel.
- 11) 『障がいの成長を信じる「夢育てアライアンス」が全国に拡大 #1 夢育て農園のいま』ノウフクマガジン #164 <https://noufuku.jp/magazine/post-20250726/>

【連絡先】

前川 哲弥 株式会社夢育て、NPO法人ユメソダテ
e-mail : maekawa@yume-sodate.com

体操・座学・畑作業などを組合わせた学習プログラムが 知的障がいのある青年の認知発達に与える影響 － 3年間の取り組みを通して－

○外山 純（NPO法人ユメソダテ 理事/よむかくはじく有限責任事業組合 代表）
前川 哲弥（NPO法人ユメソダテ/株式会社夢育て）
天田 武志（NPO法人ユメソダテ）

1 本論文の目的

夢育ては2022年から知的障がいのある青年を対象に体操・座学・畑作業を組合せて認知身体機能の発達を促すプログラムを開講している。過去2回の職業リハビリテーション研究・実践発表会（以下「職リハ」という。）それぞれにおいて、当プログラム受講生の認知機能の発達をプリとポストの2回のテストで考察した^{2),3)}。今回は、過去2論文を踏まえつつ、さらなる受講生の認知発達を2024秋冬に実施したプリテスト（以下「Pre」という。）と2025春夏に実施したポストテスト（以下「Post」という。）の比較を通じて報告する。

本論文の目的は、繰り返し学習における被験者の学習効率性を探ることである。その目的のために採用した検査はポジショナルラーニングテスト（以下「PLT」という。）である。過去2回の論文で使ったテストはいずれもひとつの問題に対して被験者は回答を1回与えるのみで、それが成績となった。今回は同じ問題を繰り返すことで、被験者がいかに自発的に自分の解答を修正して正解に近づけていくかを分析することである。受講生のなかには知的水準が十分高くない者もあり、受講者の中で今回のアセスメントが成立する3人が今回の対象である。

なお、人を育てる畑コースの概要と我々が取り組んだ新たなプログラムについては、前川他第33回職リハ論文「知的障害者を対象とした農的活動等を組合せた学習プログラムの持続的改善プロセスのデザイン」を、身体発達については天田他第33回職リハ論文「知的・発達障害者への農作業支援における運動プログラムの導入と効果」を参照されたい。

本論文の中では随所でフォイヤーシュタイン¹⁾が提唱した認知機能について言及されるが、その概要は前々回の論文に書かれている。本論文で言及された認知機能にはその段階と番号を丸括弧の中に示した。

2 アセスメントの手法と結果 PLT

(1) 概要と検査手順

フォイヤーシュタインメソッドのアセスメントであるLPADの一つ¹⁾である同名のテストをアレンジしたものである。5×5の枠の中の5つの升の位置を記憶する課題

が7問あり、徐々にパターンが複雑になっていく。例として図1にパターン7を示す。どのパターンにおいても縦の1列に記憶すべき升がひとつずつあるように配置されている。

✓				
		✓		
				✓
			✓	
	✓			

図1 PLT パターン7

検査者は空欄の5×5の枠を被験者の前に置き、一番左から順に検査者がペンの先で記憶すべき升を示していく。10秒のレイテンシにおいて被験者は覚えた升に印をつけていく。被験者が3回連続して正答するまで同じパターンを繰り返す。もし10回の試行までに被験者が連続3回正答できた場合は成功、できなかった場合は不成功として次のパターンに移る。

(2) 認知機能の観点からの分析

この検査は特に精緻化の段階の認知機能が要求される。繰り返しの学習の中でパターンを記憶する（精緻化7番）課題であり、そのために被験者は指し示された5つの場所の位置関係に注意し（入力4番）、位置の比較をもとに（精緻化3番）それらを互いに関連付けて帰納的推論をし、パターンを見いだす（精緻化5番）。その認知戦略により、より多くの情報を記憶することができる（精緻化4番）。これは一種のワーキングメモリーと言える。例えば図1のパターン7は左から右へ振幅が減衰していく波としてとらえると格段に記憶しやすくなる。

(3) 評価方法

被験者の解答を1列ごとにみて、印のついた場所が正しければその列に1点を与える。よって1パターンにつき満点は5点である。複数の印がつけられたか、何も印がつけられなかった列は0点とする。

被験者の学習効率性を測るという目的のため、被験者にとって多数の試行を要した問題のみ分析対象とする。具体的には、PreまたはPostで不成功または成功までに7回以上の試行を要したパターンを対象とする。

分析方法として回帰直線の考え方をを使う。横軸に試行回

数、縦軸に点数をとり、その平面上にテスト結果をプロットする。その散布図に対して回帰直線を引き、その傾きを表計算ソフトのSLOPE関数を使って計算する。例えばある被験者のあるパターンでの成績散布図とその回帰直線の例（図2）では、試行を重ねるにつれて、得点は上がったり下がったりしつつも緩やかに上昇する傾向が見て取れる。

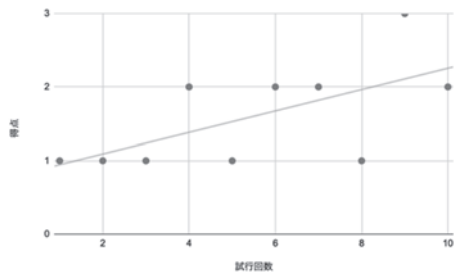


図2 成績の散布図とその回帰直線の例

回帰直線の傾きは1回の試行につき何点の得点上昇が得られたかを表している。当然傾きが高いほど学習の効率性が高い。これはいわば学習速度といえるので、以下そのように呼ぶ。

(4) 結果

被験者AはPre、Postともパターン1～4、6で成功、BはPreで1～4が成功であったが、Postではそれに加えて6に成功した。被験者CはPre、Postとも7つ全て成功した。先述の条件から、被験者Aのパターン5と7、Bのパターン5～7、Cのパターン7の計5サンプルが分析対象となった。学習速度のPreとPostの比較は次の表の通りである（表1）。

表1 PLT学習速度

被験者	Pre	Post	差	割合
A	0.003	0.021	+0.018	7.000
B	0.117	0.432	+0.315	3.689
C	0.700	0.900	+0.200	1.285
平均	0.273	0.451	+0.178	1.650

全ての被験者でプラスの変化が見られた。被験者AはPreでは学習速度が0.003とほぼ0であったが、Postでは0.021と0.018の上昇が見られ、Preに比べて7.000倍速くなった。被験者Bは学習速度が0.117から0.432に0.315ポイント上昇し、3.689倍速くなり、被験者Cは0.700から0.900へ0.200ポイント上昇、1.285倍速くなった。被験者平均では0.273が0.451と0.178ポイント上昇し、1.650倍速くなった。

3 考察 受動的な学習者から能動的な学習者へ

Preでは毎回同じ間違いを繰り返して10回の試行を終えてしまい、学習速度がほとんど0というケースが散見された。これは思考の受動性を表す。しかしPostではそのようなケースが減り、一種のワーキングメモリーである精緻化4番の認知機能を含めて前述の認知機能を積極的に働かせたことが数値として現れている。パターンを発見するという帰納的思考には比較が基礎となる。今回のアセスメントでの伸びが特に見られた被験者Bは比較課題を重視して取り組んだのであった。

4 3年間の取り組みを通して

過去2回の論文では図形、絵、言語のモダリティでの受講者の認知的な成長を数値化し特に図形と言語のモダリティでの大きな成長を確認することが出来たのだった。2023年の論文では、被験者が複雑な図形を全体と部分との関係で分析し基本構造を見出すことで、ある種のワーキングメモリーが育った可能性を示した。今回も同様の結論を得ることができたと言えよう。2024年の論文では言語のモダリティの検査での成績の上昇を数値で確認した。抽象的思考に不可欠である内言が彼らに育っており、それが多くの認知機能を組み合わせた複雑な思考をする助けになったのであろう。

今回の論文では認知的な介入が繰り返し学習の効率を高めることを数値的に確認した。知的障がい者の教育・訓練では繰り返すことが大事だとされている。しかし単に繰り返すだけでは不十分で、被験者AのPreのように学習速度が0である場合も特別支援学校や福祉作業所では多いのではなかろうか。学習者の認知機能を高め、より能動的に働かせることが必要だ。3年間の取り組みを通して、夢育ては知的障がい者の認知機能を高めるノウハウを蓄積してきており、それを広く社会に提供する用意がある。

【参考文献】

1) Feuerstein, R., Feuerstein, S., Falik, L & Rand, Y. (1979;2002). Dynamic assessments of cognitive modifiability. ICELP Press, Jerusalem: Israel.

2) 外山、前川『畑作業と体操、座学を通じた学習が、知的障がいのある青年の認知発達に与える影響について』JEED第31回職業リハビリテーション研究・実践発表会発表論文集（2023）, p. 62-63

3) 外山、前川『体操、座学、畑作業を組合せた学習プログラムが知的障がいのある青年の認知発達に与える影響についての継続的な研究』JEED第32回職業リハビリテーション研究・実践発表会発表論文集（2024）, p. 128-129

【連絡先】

NPO法人ユメソダテ
前川 哲弥（maekawa@yume-sodate.com）または
外山 純（toyama@yume-sodate.com）